

第 1 章 位相角をとらえる

川 名 晋 史

序文でみた左・右、あるいはリベラル・保守の二項対立が「硬直」するのはなぜだろうか。また、そのような状況から抜け出すにはどうしたらよいだろうか。ここでは、いくつかの単純なモデルを設定し、その範囲において示唆される二項対立の硬直（第1節、第2節）と、そこからの脱出（第3節）のイメージを探っていく。

第 1 節 政治的スペクトル

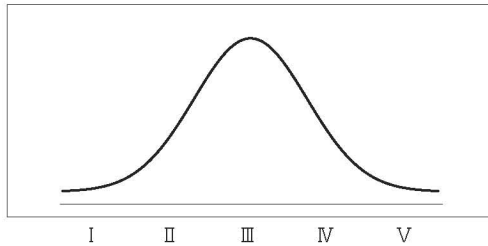
手始めに、いまわれわれの社会に5段階の政治的スペクトルが存在すると仮定しよう。¹⁾それぞれのスペクトルには、便宜上、急進的リベラル（Ⅰ）、リベラル（Ⅱ）、中道（Ⅲ）、保守（Ⅳ）、急進的保守（Ⅴ）という直観的な名前を与える。確率統計上、各スペクトルの分布は正規分布に従うものとする。

すると、社会全体の政治的スペクトルの分布は、中道のボリュームが最も大きく、左右両極に向かって下りのスロープを描く正規曲線として示される（図1-1）。急進的リベラルは小規模なグループであり、そこから右に進むにつれて、より大きなリベラルのグループが存在する。さらに、その先には最もボリュームの大きい「中道」が広がっており、その向こうには、保守、そして一握りの急進的保守の領域がある。

ただし、この図が示しているのは、あくまでも独立した個人の政治的傾向、すなわち、他人とのコミュニケーションや影響関係が存在しない場合のそれであり、われわれの社会の姿を正しく反映するものではない。

そこで、次に、個々人が²⁾接続され、互いに「引き込み（entrainment）」あう状態を仮定してみる。つまり、人々は他人とコミュニケーションし、他者の政治的傾

図 1-1 独立した個人からなる社会の政治的スペクトルの分布

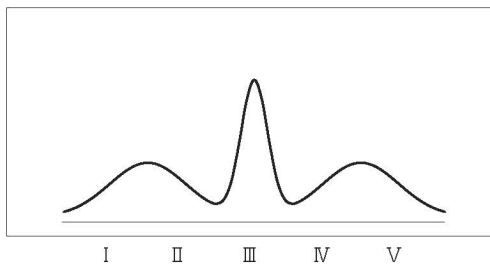


出所：筆者作成。

向に影響を与え、また自らの傾向を自在に変更できるという仮定である。たとえば、スペクトルが左に位置する人は、周囲から右に移動するように説得され、逆に右の人は、より左に位置をずらすように働きかけられる。

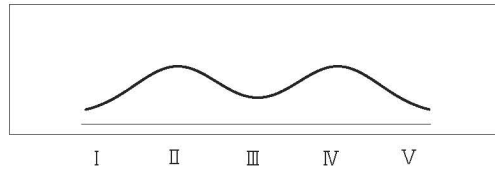
このような仮定は、おそらく現実の社会の姿を先ほどよりはうまく反映している。³⁾そして、この場合に生じる政治的傾向の分布は、もはや正規曲線ではない。なぜなら、個々人が互いのスペクトルを引きあえば、そこでは最もボリュームが大きい（したがって、引きの力が最も大きい）中道への強烈な引き込みが生じると考えられるからである。つまり、中道の両隣に位置するリベラルと保守の陣営から、それぞれの「穏健派（つまり、リベラルと保守のなかでも、より中道寄りのスペクトルをもつ者）」が引き抜かれる。そしていったんそのようなドライブがかかれば、おのずと曲線の中心に向かって背の高いピークが形成されていくはずである。

図 1-2 相互作用する個人からなる社会の政治的スペクトルの分布



出所：筆者作成。

図1-3 実際に立ち現れる政治的スペクトルの分布



出所：筆者作成。

一方で、どれほど中道への引き込みが強かろうと、左右両端の意思強固なグループ、すなわち急進的リベラルと急進的保守を立ち退かせるほどの力はないかもしれない。したがって、われわれの社会においてより「自然」に生じると考えられる政治的傾向の分布は、少なくとも理屈のうえでは、図1-2のようなもの、すなわち、極端なピーク1つと2つのくぼみをもつものとして表されるだろう。⁴⁾

ところが、序文でみたように、現実の社会はそうっていない。つまり、実際に出現する分布のピークは「中道」(III)にではなく、図1-3のように「保守」(IV)と「リベラル」(II)にあるようにみえるのである。ならば、図1-2のモデル上、「中道」に生じると考えられるピークの出現を阻むものは何か。それは、後述のように、われわれがこの領域を適切に表現するための安定した語彙をもたず、したがってそこから導出されるはずの政策的選択肢を可視化できていないことに起因するのかもしれない。つまり、生来の性向に従えばIIIにプロットされるはずの人々が、次々とその両脇の領域に引き剥がされる、あるいは自発的に移転していくのは「中道」に特有の理論的、あるいは政策的な所在なさ⁵⁾に由来すると考えるのである。

第2節 「保守」と「リベラル」の硬直

では、かようにして出現する2つの政治的スペクトルの「山」が硬直するのはなぜか。なるほど、遠藤・遠藤(2014)がいうように、この2つの陣営は「お互いを軽蔑し、語り合う共通言語を持たぬかのように、知識人の間ですら対話は困難を極めて」⁶⁾いるようである。しかし、一方で両者は実に円滑に「対話」し、

互いに指示を与えながら、息を合わせて協同しているようにみえなくもない。

もっとも、それは当然かもしれない。なぜなら、もし各々の陣営が真に対話せず、独立に思想を展開／発展させているとすれば、物理法則よろしくそれ自身がもつエネルギーは散逸し、やがて動きを停止させざるをえないはずだからである。このように考えれば、「保守」と「リベラル」の2つの思想は、さながら論争を熱エネルギーに変換し、運動を続ける物理的実体のようである。実際、冷戦期においては、保守はリベラルの夢想性、非現実性を正すことを糧にしてきたし、リベラルはリベラルで、保守の誤謬や過信を正すことに精を出してきた。もっとも、序文でみたように、そのような両者の緊張関係そのものは思想の展開にとっては健全なことである。

問題は、両者の間に継続的に斥力（相反する力）が働き、そのことが二項対立を硬直させうることである。つまり、斥力相互作用が生じるような物理的状态においては、両者の間隔は次第に広がりを見せ、最終的にはまるで「見えな

い紐」でつながれているかのように、ちょうど正反対の位置で停止する。⁷⁾
もちろん、これはアナロジーにすぎないが、たとえば日本の憲法をどうするかという問題ひとつをとってみても、そこから得られる洞察は小さくないように思われる。つまり、もし保守とリベラルの思想が、斥力相互作用する物質のように振る舞うとすれば、両者はまったく同じ位置（原点）から思考をスタートしたとしても、他方が憲法の不備を突けば、一方はその重要性を主張するといった具合に「逆張り」を繰り返していく。すると、両者の位相は次第に広がり、やがて紐がぴんと張る（斥力と紐の張力が釣り合う）位置、すなわち「改憲派」と「護憲派」の立場におのずと落ち着くことになる。

その過程では、改憲派も護憲派も相手の主張に細心の注意を払い、したがって自分がどこの位置にしようが、相手の動き次第でその立ち位置にしかるべき調整を加える。双方にとって重要なのは、自身の絶対的な位置ではなく、相手との相対的な位置関係である。同様の問題は、日本の安全保障政策をめぐるさまざまな論争において観察される。そこにみられる調整行為、あるいはフィードバックこそが、分極した二項対立を固定化する力学である。つまり本書のいう「思考停止」とは、いわゆる「保守」と「リベラル」の思想がそれぞれに挙動を停止させている状態ではなく、動的な平衡状態にあることを意味している。

第3節 「位相角」の考え方

では、このような硬直した二項対立から抜け出すにはどうしたらよいのか。ここでは、試論的ではあるものの、すでにみた政治的スペクトルⅢの空間的拡張にその契機を見出そう。それはともすれば曖昧で、玉虫色だった「中道」あるいは、中間領域の再定義である。具体的には、従来の左・右／リベラル・保守の一次元空間（図1-4）をちょうど中央から「折りたたむ」イメージで、縦軸と横軸に囲まれた二次元空間（図1-5）を作り出す。それによって、先の図1-3で中間領域から引き剥がされていた人々を本来の位置に帰還させるニッチ（図1-5の1と3）を生み出す。新たに可視化されるかような中間領域は単なる「折衷主義」の領域ではない。そこには明瞭な学術的語彙と実行可能な政策の選択肢が用意されているはずである。

図1-5では、政治的スペクトルの空間が任意の x 軸と y 軸によって、4つの領域に区切られている。なお、 x と y のそれぞれの軸はイシューごとに設定されるものである（次章以降参照）。

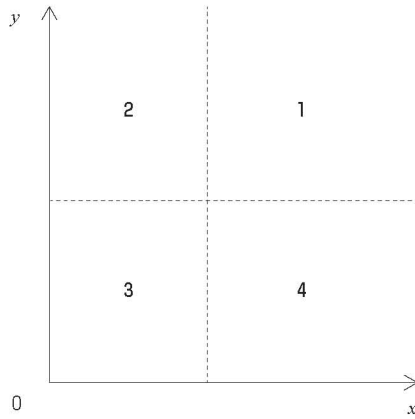
ここでは右上から反時計回りに、第1領域、第2領域、第3領域、第4領域としておこう。先にみた図1-1との対応関係でいえば、第1と第3領域が「中道」の領域である。第2領域は、「急進的リベラル」と「リベラル」の領域であり、0に近ければ後者、遠ければ前者である。第4領域は、「急進的保守」と「保守」の領域であり、先と同様、0に近ければ後者、遠ければ前者ということになる。繰り返せば、ここでの「保守」や「リベラル」等の名称は、われわれの社会における思想や言説の配置、ないしその空間イメージをつかむため

図1-4 一次元空間における左・右／リベラル・保守



出所：筆者作成。

図1-5 二次元空間における4つの領域



出所：筆者作成。

の記号にすぎない（次章以降、個別のイシューに対応した固有名詞が与えられる）。

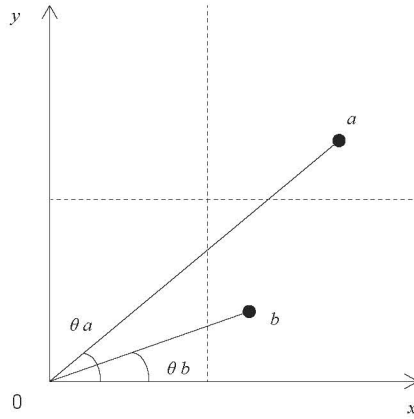
図1-5は分類のための枠組みというよりも、動的な分析枠組みと考えたほうがよい。ここでは、他者との政治的スペクトルの違いを2つの要素、すなわち0からの直線距離(d)と角度(θ)で表現している。本書では、とりわけ後者の角度のことを「位相角」と呼ぶ。これにより、特定の政治的スペクトルをとる思想 a の位相角は、 θa と表現される（図1-6）。

本書が主張するのは、任意の2地点が0からの距離(d)を異にしたとしても、各々の位相角の差($\theta a - \theta b$)が0に近づくほど、互いの立場に本質的な矛盾はなく、政策的にも接近可能ということである。

図1-7をみてみよう。いま、第1領域と第3領域にプロットされる任意の2つの政治的立場(c, d)があり、両者は0からの距離が大きく異なっている(dc, dd)。通常、このような両者の立場は大きく異なってみえるはずである。片や x と y の両方の値が大きく、他方はそれがどちらも小さいからである（より具体的なイメージについては、次章以降参照）。しかし、そのような2つの立場であっても位相角($\theta c, \theta d$)を近似させていれば、合意可能な政策の幅も大きいと考えるのが本書の立場である。

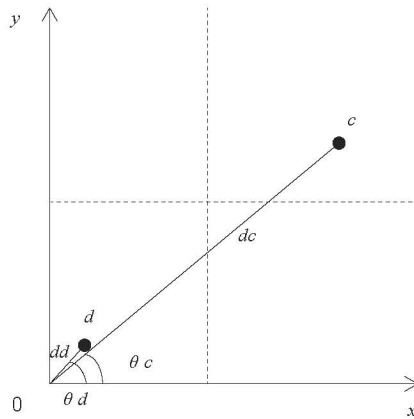
二項対立からの「脱出」の問題を考えるうえで重要なのは、第1領域と第3

図 1-6 位相角



出所：筆者作成。

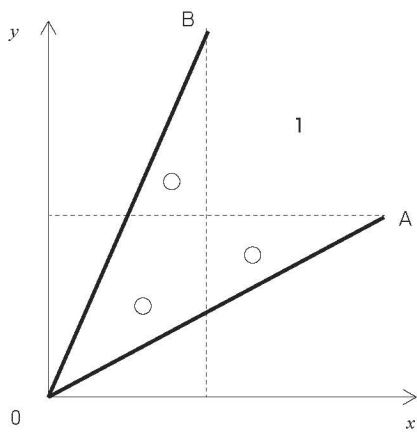
図 1-7 距離と位相角



出所：筆者作成。

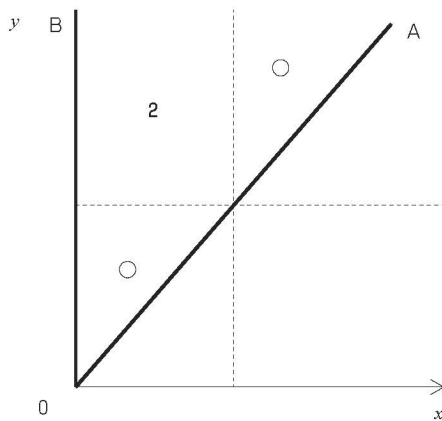
領域である。というのも、第 1・第 3 領域は他のそれぞれの領域と位相角を等しくできるからである。このことを図示しているのが、図 1-8 から図 1-11 である。各領域が他の領域と位相角を等しくできるのは、直線 A（角度の最小値をとる太線）と直線 B（角度の最大値をとる太線）で囲まれた範囲である。

図 1-8 第 1 領域が他の領域と位相角を等しくする範囲



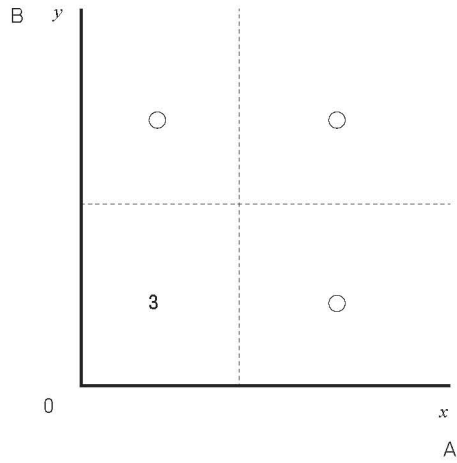
出所：筆者作成。

図 1-9 第 2 領域が他の領域と位相角を等しくする範囲



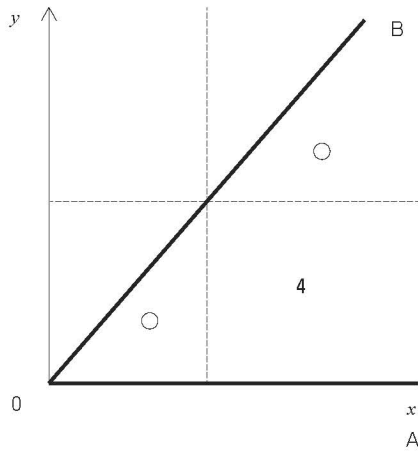
出所：筆者作成。

図 1-10 第 3 領域が他の領域と位相角を等しくする範囲



出所：筆者作成。

図 1-11 第 4 領域が他の領域と位相角を等しくする範囲



出所：筆者作成。

そこから明らかなように、位相角を等しくする領域の数（すなわち、○の数）が多いのは第1・第3領域であり、第2・第4領域がそれに続く。このことから、第1・第3領域は他の領域への転出や、それとは逆に他の領域（とりわけ、第2・第4領域）からの転入が生じやすい領域であり、またそうであるがゆえに領域間の論争を架橋し、調整することが期待される。

一方、位相角の差が90に近づくほど、2つの立場は議論の土台を共有しない。第2領域（の左上）と第4領域（の右下）がそれである。ただし、そのこと自体は、従来の一次元空間、すなわち（左・右／リベラル・保守の）距離の概念（図1-4）でも十分に表現可能であった。

しかし、それでもなお、本モデルが重要と考えられるのは2つの理由による。まず、繰り返しになるが、従来、対立が硬直しがちだったリベラル・保守、すなわち第2・第4領域それぞれの手の届くところに、明瞭な学術の語彙を伴う第1と第3の領域が出現する。そこはおそらく、穏健なりベラルと穏健な保守にとっての現実的な移転先の候補となるはずである。このことは、立場の異なる2つの議論の接近を考える際の手がかりとなるだろう。

次に、このモデルに従えば、第3領域はその内部において任意の2地点の位相角の差が最大で90をとる。つまり、この領域の議論ないし政策的処方箋の分散は大きく、ともすれば矛盾を含んだものが共存しうることを示唆している。このことは、いわゆる「中道」と呼ばれるものの性質を理解するうえで一定の意味をもとう。

注

- 1) Steven Strogatz, *Sync: The Emerging Science of Spontaneous Order*, Penguin Books, 2003, pp.43-45.
なお、ここでいう「われわれの社会」とは、平時における自由・民主主義的な社会のことである。すなわち、個人の思想・表現の自由が保障されており、かつそれを政治に反映させるための制度的基盤が整備されている社会を指している。
- 2) 「引き込み」は自己組織化にみられる普遍的なメカニズムであり、生物と非生物からなる自然界に広くみられるものである。たとえば、蔵本由紀ほか『パターン形成』朝倉書店、1993年、150-162頁。
- 3) K.W.ドイッチュ（伊藤重行ほか訳）『サイバネティクスの政治理論』早稲田大学出版部、2002年、186-204頁。
- 4) ウィーナー（Norbert Wiener）はこれを脳内の神経振動子、「アルファ波」のパター

ンに関する議論において提示する。Norbert Wiener, *Nonlinear Problems in Random Theory*, The M.I.T. Press, 1958, pp.68–69.

- 5) なお、図 1-1, 図 1-2, 図 1-3 の正規分布およびその関数を設定するにあたり, 東京工業大学・川名研究室の栗岡保, 添田晴也, 高松裕, 山本洵哉の協力を得た。
- 6) 遠藤誠治・遠藤乾「なぜいま日本の安全保障なのか」遠藤誠治・遠藤乾編『安全保障とは何か』岩波書店, 2014年, 21頁。
- 7) このような類推は, ノーバート・ウィーナー (鎮目恭夫・池原止戈夫訳)『人間機械論——人間の人間的な利用 [第 2 版]』みすず書房, 1979年。ウィーナー (池原止戈夫ほか訳)『サイバネティクス——動物と機械における制御と通信』岩波書店, 2017年。